

# そよ風

第2号

今治市立立花中学校

## 「雨の日の届け物」

「ねえ、ここの問題、どうなるの？」

「ええと、ここは、エックスを移項して……。」

日はもう傾いている。もう六時近いだろうか。遊んでいた子どもたちも母親に連れられて家路についている。

ここは松ヶ枝公園の木かげのベンチである。隣に座っているのが通称“ひとみ”と呼んでいる松島ひとみである。私たちは近くに迫っている期末テストの準備に取り組んでいた。お互いに教え教えられ、私たちは本当に一生懸命であった。しかし、このような状態になるまでには、いろいろなことがあった。私は問題を解くためにうつむいているひとみを見て、ふと以前のことを思い出していた。

それは中学二年の晩秋のことであった。放課後のクラスに私たちは残っていた。

「理科どこまで進んだ？」

「うん、ここまで。」

「それじゃこの問題は どうして解くの？」と私は指さす。

「……。」

ひとみは答えない。

「そしたらここは？」

「……。」

また答えてくれない。私は少しがっかりしたが、もう一度聞いた。すると、

「クラブのことだけどね、今さ……。」

と突如としてこんな話を持ちこむ。

私は悔しかった。私は病弱であり、持病のぜんそくのため、そのときも長いこと休んでいるので分からなくなってしまっていた。そんなとき、ひとみが私に教えてくれると言ったので、彼女についていった。そう、ひとみのほうから誘ったのだ。それなのに肝心の質問をするとすぐ別の話に変えて話をそらす。ちっとも教えてくれない。そして別のことを、私に何の関係もないことや知らない人のことなど、ごたごたと話している。全く腹が立つ。どうも、ひとみは教えるとは言ったものの、いざとなったらライバル意識を感じて教えてくれないらしい。

いや現にそうだった。私は胸の奥から怒りがこみあげてくるのが分かった。信じてついてきた自分がはがゆかった。悔しかった。ひとみの心が憎かった。私はこみあげてくる感情をおさえてその場を去った。私は家に帰ってからひとり部屋にとじこもって泣いた。それからというもの、顔を合わせても私たちは軽いあいさつをかわすだけで心の中が冷えきっていた。しばらくそんな日が続いた。

ある日の放課後、私はある先生から呼ばれて用事をこつづかった。偶然ひとみの姿もあった。私は顔を合わせたくなかった。しかし気になってちらっと見てみた。目があつた。ひとみは少しほほえんだようだった。私には意外なことだった。しかしあのときの彼女の態度を許すわけにはいかなかった。

しかし、そのあとひとみの方から声を掛けてきた。内心少しうれしかった。私の心の中には“許さない”と思う反面、声を掛けてくれたらしゃべりたいという気持ちもかすかにあつた。

結局、私たちは、屋上につながる階段のおどり場で話し合っていた。彼女は平然とした様子でありきたりの話をする。私はむずむずしていた。時は刻々と流れていく。私は決心した。そして、とうとう心の中にあるもやもやを彼女にぶつけた。

「どうしてこの前はあんな態度をとったと？悔しかったとよ。」と。

すると彼女は答えた。

「あのときは確かに教えてやりたくないようなライバル意識はあつたけど……。」

私はやっぱりと思った。また、沈黙が続いた。しかし私はもう、そのときひとみをうらんだり憎んだりしていなかった。むしろ本心をすなおに隠さず言ってくれたひとみが気に入った。

こういうちょっとしたきっかけからまた二人はもとの仲にもどっていった。

うらに続く

中学三年になってからのある日のこと。ひとみが私を楽器室に呼び出した。何だろうと思いながら戸を開けた。そこには小さい白いスズランの花があった。彼女の父が北海道へ行ってお土産に持ってきたのだった。小さな花がゆれていた。ひとみはだまって私を見つめる。私もひとみを見上げた。ひとみは無言でスズランを指さした。そして私のほうを向いて手で押した。どうも持って帰れと言っているようだった。

「なぜ？」私は聞いた。

「なんでも。」彼女は答えた。

花の香りが小さな部屋いっぱいになりこめた。心の糸がすこしほどけた。彼女は口をひらいた。

「かわいからう。花が散るまでおいとってよ。家にあつて世話するのはめんどくさかったからさ。」

なんとなくそのへたな人だろう。私は心でくすくすと笑った。(ただめんどくさいだけで持ってくるものですか。もってくるほうがよっぽどめんどくさいのに) と思いながら……。

ひとみはにこっと笑った。

「ありがとう。」私はひとこと返事をした。

彼女は私の気持ちを分かってくれたように、また微笑した。

しかし、あいにくと雨が降りはじめた。

放課後には、だんだんとどしゃぶりになった。かばんを持ってかさをして、そのうえスズランの鉢なんて持てるわけがない。そう思った。彼女のクラスは学活(帰りの会)が長引きそうである。私は家に帰ってから彼女に「明日持って帰るから」と電話するつもりで別の友達と帰った。そして家に着き彼女に電話をかけようとしたときだった。ピンポンと玄関のチャイムが鳴った。私は戸を開けた。なんとひとみが来ているではないか。私はびっくりした。

「クラブの帰りによってみただけさ。」

彼女は、いとも簡単に言っただけだ。クラブの帰りといっても反対の方向の私の家である。私は不審に思った。私は視線を下げて言った。思わず「あっ。」と声をあげてしまった。なんと私は二度びっくりしてしまった。彼女の手の中には鉢があり、小さな白い花がゆれていたのである。どうやって持ってきたのだろうか。肩のあたりはぐっしょりとぬれていた。スカートも雨のためにごわごわである。白いソックスには、黒いとぼっちり、くつもずぶぬれであった。私は顔がカッと熱くなりだんだんと赤くなっていくのが分かった。ほんとうに恥ずかしかった。私は彼女の純粋で真剣な気持ちを簡単な気持ちで軽くあしらっていたことを悔いた。また、心の糸がとけた。外はもう小雨になっていた。なんとなくさわやかな風が私の心を通っていった。

もう公園には、私たち二人のほかにはだれもいなかった。

私たちはまだ十分な友とは言えないかもしれない。しかし、いつのときでも真実を言えることは確かだ。お互いに性格がおとなしくないとすくすぐ素直になれない。そのためのトラブルがこれからも起こることだろう。しかし、そのときはそのとき。また何らかの形で話をし、なぜそうなったのかという原因を追求しようと思う。話し合いをすることによって友情を進歩させていこうと思う。そんなことをあれこれと思っているとき、

「解けたよ。分かったよ。むずかしかったけど。」

というひとみの声。私たちは見合って笑った。初夏の風がさわやかだった。空はいつのまにか夕焼けにかわっていた。

---

これは道徳の読み物資料にもなっているある女子中学生の作文です。

ちょっとしたことで友だちとの関係がぎくしゃくしてしまったことはありませんか。私は中学校時代を振り返るとたくさんの苦い経験があります。「私たちはまだ十分な友とは言えないかもしれない。トラブルがこれからも起こるだろう。しかし、そのときは話し合いをすることによって友情を進歩させていこうと思う。」という作者の言葉に、「あの時こうしておけばよかった。あの人にこう言っていたらよかった。」といった後悔や反省が鮮明によみがえってくるのです。

人は多くの人とかかわりあいながら成長していきます。

ともに笑い、泣き、けんかし、仲直りして、助け助けられ、励まし励まされて……、一日一日はそんな小さなドラマの繰り返しです。

仲の良い人、そうでもない人。人と人との付き合い方や距離感はいろいろだけれど、誰もがお互いを認め合うことができれば豊かな人生になるのだろうと思うのです。

